

コラム

四つ子?のS字甕

朝日遺跡の中央部で検出された、竪穴住居から一括出土したS字甕である。4点とも、口縁部の直径が14cm前後、高さ21cm前後、胴部最大径20cm前後と、ほぼ同じサイズとなっている。すべてS字甕C類に分類することができ、S字甕が規格化されていたことがわかる事例である。



12-1 ©住居跡一括出土のS字甕 朝日遺跡
(古墳前期/本館蔵)

参考文献

愛知県教育委員会1982『朝日遺跡Ⅳ』
愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』、1994『朝日遺跡Ⅴ』、1994『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ、月縄手遺跡Ⅱ』、1997『大毛池田遺跡』、1997『西上免遺跡』、2012『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』
一宮市1967『新編一宮市史 資料編2』
塔の越遺跡発掘調査団1988『塔の越遺跡発掘調査報告書』
三重県教育委員会1980『納所遺跡』
三重県埋蔵文化財センター1992『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡』、1998『嶋抜第1次調査』、1999『位田遺跡発掘調査報告』、2001『嶋抜Ⅲ』、2002『六太A遺跡発掘調査報告』
赤塚次郎2009『幻の王国・狗奴国を旅する』風媒社
赤塚次郎1986「『S字甕』覚書 '85」『年報 昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎・早野浩二2001『松河戸・宇田様式の再編』『研究紀要第2号』愛知県埋蔵文化財センター
加納俊介1990「S字甕とS字甕もどき-土器分類雑考(2)」『マージナル』10愛知県考古学談話会
川崎志乃2006「S字系手焙形土器の行方」『古代学研究』175
第4回東海考古学フォーラム尾張大会『鍋と甕 そのデザイン』
東海考古学フォーラム三重大会実行委員会2000『S字甕を考える』
原田幹2013『東西弥生文化の結節点 朝日遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」088新泉社
S字甕胎土研究会1998「S字甕の混和剤を考える」『考古学フォーラム9』

あいち朝日遺跡ミュージアム

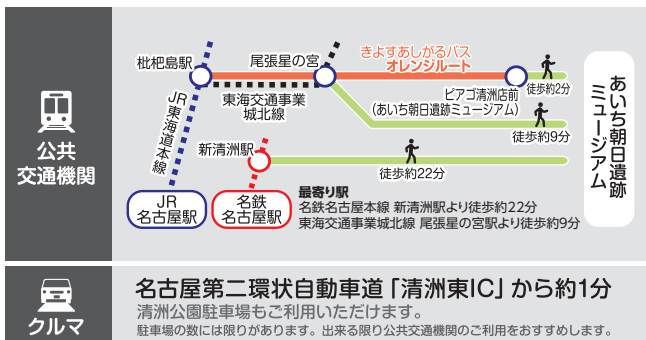
■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■ TEL: 052-409-1467 ■ 駐車場 15台

企画展 「『S字甕』というとても
薄い甕が流行っていた件」



編集・発行：あいち朝日遺跡ミュージアム
2025(令和7)年4月26日発行

AICHI ASAHI
SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム



企画展

「S字甕」という
とても**薄い甕**が
流行っていた件

AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム

はじめに

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、伊勢地域・尾張地域では、「S字状口縁台付甕」(以下「S字甕」)と呼ばれる特徴的な土器が流行した。アルファベットの「S」のように屈曲する口縁を持ち、主に煮炊きに使われた土器である。それまでの土器に比べ非常に薄く作られており、高度な製作技術を垣間見ることができる。また、S字甕はデザインが規格化された先進的な土器であるとともに、祭祀儀礼や地域の社会情勢を反映し、ときに人々の移動・交流を物語る重要な考古学的資料でもある。

本企画展では、本館及び愛知県埋蔵文化財調査センター(弥富市)、三重県埋蔵文化財センター(三重県多気郡明和町)、一宮市博物館(一宮市)が所蔵・保管する主要なS字甕関連資料を展示し、その誕生から終焉までの変遷を紹介するとともに、弥生時代から古墳時代にかけての伊勢湾沿岸の地域社会の変化について考える。

目次

はじめに	2
S字甕とは何か	3
S字甕の分類・変遷	4
0類/A類	
B類/C類	
D類/宇田型甕	
異形のS字甕たち	8
山陰系口縁S字甕/S字系手焙形土器/ S字甕のミニチュア	
S字甕の拡散	9
S字甕と砂の話	10
S字甕と墓の話	11
〈コラム〉四つ子?のS字甕	12



1.朝日遺跡(清須市・名古屋市西区)、2.廻間遺跡(清須市)、3.月縄手遺跡(名古屋市西区)、4.塔の越遺跡(稲沢市)、5.元屋敷遺跡(一宮市)、6.西上免遺跡(一宮市)、7.大毛池田遺跡(一宮市)、8.六大A遺跡(津市)、9.納所遺跡(津市)、10.位田遺跡(津市)、11.雲出島貴遺跡(津市)、12.阿形遺跡(松阪市)

2-1 遺跡位置図

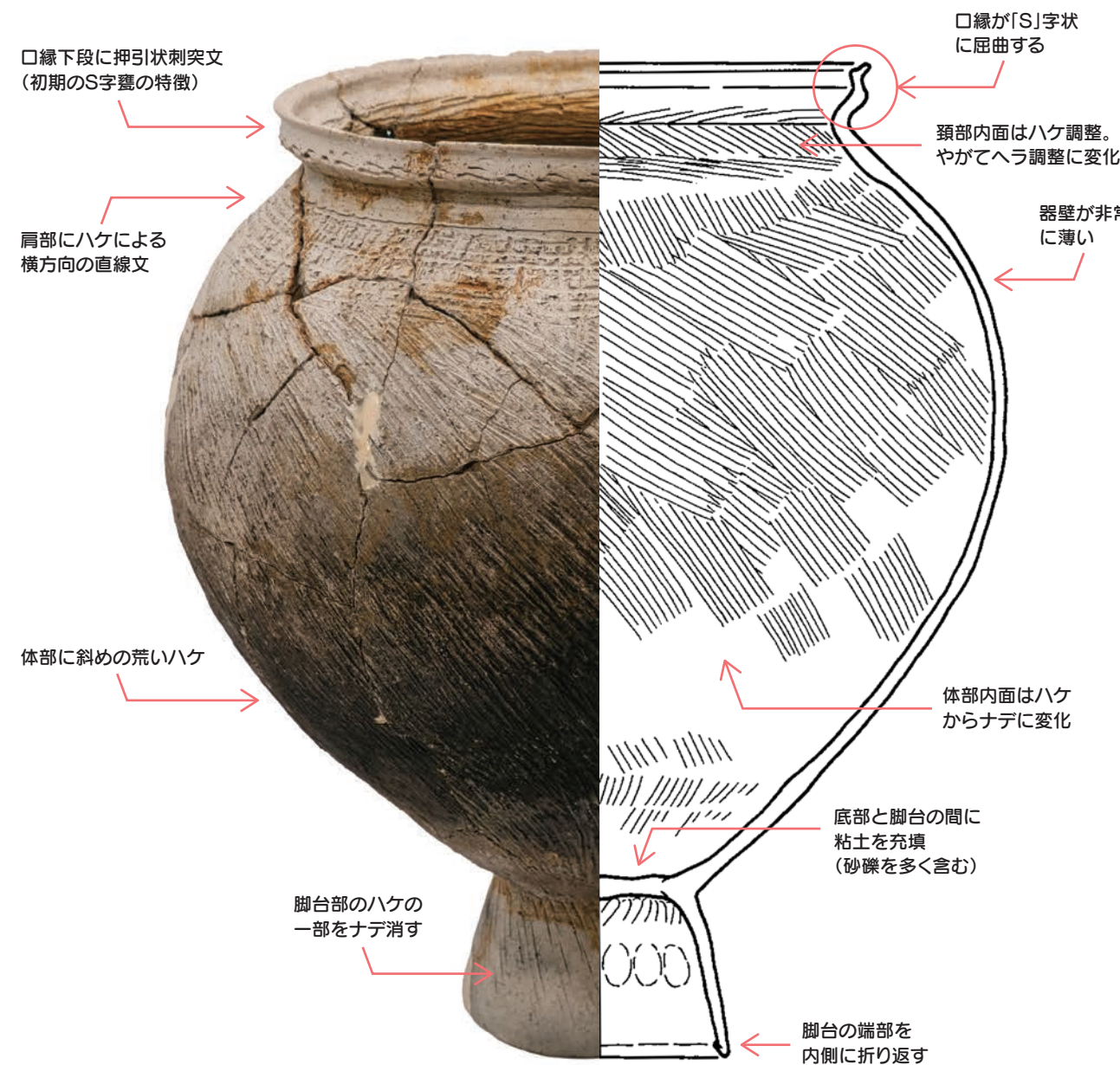
凡例

- ・本書は2025年4月26日から6月22日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「S字甕」というとても薄い甕が流行っていた件」の展示パンフレットである。
- ・本企画展の年代観は、弥生時代後期(AD.1~2C)、終末期(AD.2末~3C)、古墳時代前期(AD.3C中頃~4C)とするが、各地域の併行関係は厳密なものではない。また、尾張地域の弥生時代終末期/古墳時代前期・中期の土器型式は、廻間Ⅰ式/廻間Ⅱ式・廻間Ⅲ式・松河戸式・宇田式とする。
- ・掲載資料には、本企画展で展示されていないものもある。
- ・掲載資料のうち重要文化財には「◎」を付している。
- ・掲載写真及び図の出典は頁下に記した。
- ・本書の執筆・編集は、松本彩、原田幹が行った。
- ・本展覧会開催にあたり、下記の機関・個人から協力を得た。
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、愛知県埋蔵文化財調査センター、一宮市博物館、三重県埋蔵文化財センター、赤塚次郎、上村安生、城ヶ谷和広、高山英里香、瀧はる香、渡邊峻

S字甕とは何か

S字甕の特徴は口縁部が短く屈曲することで、口縁の断面が「S」の字に見えることが名称の由来となっている。底には脚台部が付くことで、安定して置くことができる。また、この土器は、器壁が非常に薄く作られており、最も薄いところでは2mmほどしかなく、他の甕と比べてとても軽量な点も大きな特徴といえる。この他にも、外面に荒いハケがみられ、肩部には横方向の直線文が施される、脚台の端部を内側に折り返す、胴底部と脚台の接合部に砂礫を多く含んだ粘土を充填する、初期のS字甕は口縁下段に押引き状の刺突文を施すなど、製作上の細かなルールが定められており、きわめて規格的な作りとなっている。

2~3世紀初頭のS字甕は、三重県・愛知県・岐阜県の一部を含む伊勢湾周辺地域に分布しており、これらの地域で生み出されたと考えられる。(原田幹)



3-1 ◎S字甕 朝日遺跡(弥生終末/本館蔵)

S字甕の分類・変遷

S字甕は、口縁部の形態をはじめとするさまざまな特徴から、0類^{ゼロ}～D類に分類されている。以下、S字甕の後に続く宇田型甕とあわせてその特徴を概観する。（松本彩）

分類	実測図	特徴等
O類		・口縁部外面に刺突文 ・頸部下に刺突文が残る ・内外面ハケ調整 ・体部が長胴形（→A類） ・胎土に混和材としての砂が混ぜられている。
A類		・口縁部下段がほぼ垂直に立ち上がり、上段の突出が少ない ・口縁部に押引きの刺突文 ・外面のハケは上部に幅狭く施される ・体部はナナメハケのあとヨコハケ ・内面の屈曲部にハケ（4-2） ・体部内面はハケ後ナデ
B類		・口縁部上段の突出が大きくなり、口縁端部に明瞭な面をもつ ・口縁部の刺突文が省略される ・外面ヨコハケが下がり、肩が張る ・体部に羽状のハケ（4-3） ・脚台部内面に折り返しがみられる（4-4）
C類		・口縁部の屈曲が外方向へ大きく拡張 ・一条の沈線が頸部屈曲部にめぐる（4-5） ・内面がヘラによるナデ調整（4-6） ・体部は肩が大きく張る
D類		・口縁部端面に明瞭な端部をもつ ・口縁部のS字の屈曲が痕跡化してくる ・器壁が厚くなり始める（→宇田型） ・ヨコハケが次第になくなる ・体部が長胴化（→宇田型） ・脚台部がハの字にひらく（4-7）
宇田型		・口縁部のS字の屈曲を失い、端部は面をもつ ・器壁が厚くなる ・体部の長胴化が顕著となる ・脚台部は低く大きく開く

4-1 S字甕の分類

4-1: 本館作成 (①.位田遺跡、②.西上免遺跡、③・④.廻間遺跡、⑤・⑥.大毛池田遺跡) 4-2～7: 本館撮影



4-2 頸部内面ハケ



4-3 体部の羽状ハケ



4-4 脚台内面の折り返し



4-5 頸部屈曲部の沈線



4-6 頸部内面ナデ



4-7 ハの字に開く脚台部

0類



5-1 S字甕 位田遺跡
(弥生終末／三重県蔵)



5-2 S字甕 阿形遺跡
(弥生終末／三重県蔵)

A類



5-3 S字甕 納所遺跡
(弥生終末／三重県蔵)



5-4 S字甕 西上免遺跡
(弥生終末／一宮市博物館蔵)

5-1～4: 本館撮影

B 類



6-1 S字甕 廻間遺跡
(古墳前期／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



6-2 ◎S字甕 朝日遺跡
(古墳前期／本館蔵)

D 類



7-1 S字甕 月縄手遺跡
(古墳前期／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



7-2 S字甕 大毛池田遺跡
(古墳前期／一宮市博物館蔵)

C 類



6-3 S字甕 廻間遺跡
(古墳前期／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)



6-4 S字甕 廻間遺跡
(古墳前期／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵)

宇田型



7-3 宇田型甕 納所遺跡
(古墳中期／三重県蔵)



7-4 宇田型甕 大毛池田遺跡
(古墳中期／一宮市博物館蔵)

6-1～4：本館撮影

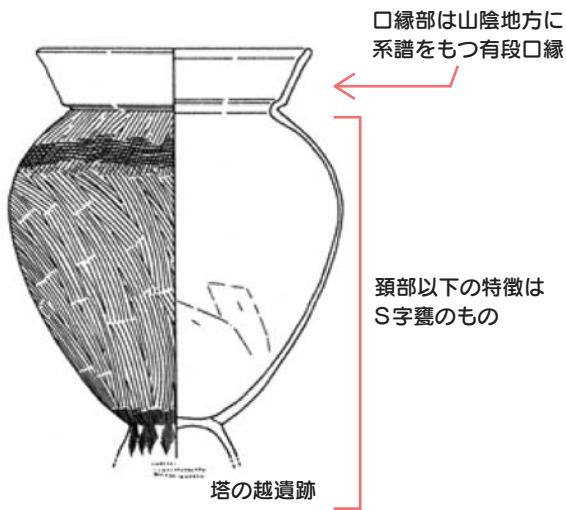
7-1～4：本館撮影

異形のS字甕たち

山陰系口縁S字甕



8-1 山陰系口縁S字甕 雲出島貫遺跡
(古墳前期／三重県蔵)



8-2 山陰系口縁S字甕実測図

山陰地方の甕に系譜をもつ有段口縁甕だが、体部以下の特徴はS字甕そのものである。大型品に限定されるのも特徴であり、古墳時代前期の地域間交流の中で生み出された折衷土器の一種と考えられている。

S字系手焙形土器



8-3 S字系手焙形土器 雲出島貫遺跡
(古墳前期／三重県蔵)



8-4 S字系手焙形土器 六太A遺跡
(古墳前期／三重県蔵)

てあぶりがたとき
手焙形土器は、暖を取るための手焙りに形が似た土器で、弥生時代終末期から古墳時代前期の祭祀用土器と考えられている。本例は口縁がS字状の形になっておりS字甕との関係がうかがえる資料である。同様な手焙形土器は、わずかだが伊勢・大和地域を中心に出土している。

S字甕のミニチュア



9-1 S字甕のミニチュア
元屋敷遺跡
(古墳前期／一宮市博物館蔵)



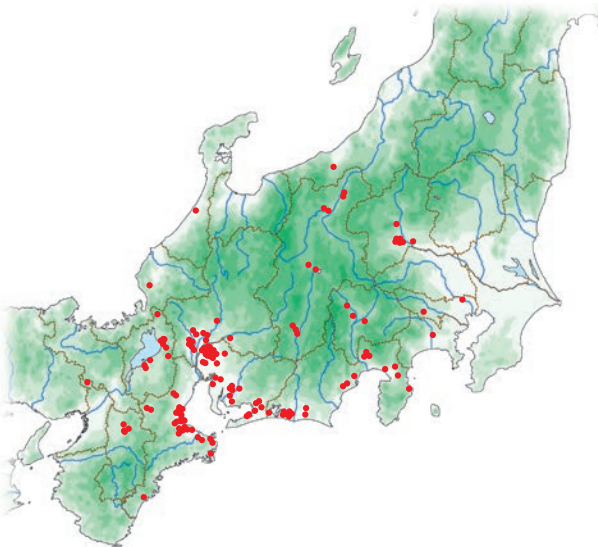
9-2 S字甕のミニチュア 六太A遺跡
(古墳前期／三重県蔵)

高さ10cmほどのS字甕を模したとみられるミニチュア土器。かなりデフォルメされ、口縁がS字になっていないものもあるが、全体の形状やハケなどの調整からS字甕がモチーフとみられる。実用品ではなく、祭祀儀礼に用いられたものであろう。（原田幹）

S字甕の拡散

2～3世紀前半、初期のS字甕は三重県・愛知県・岐阜県の一部を含む伊勢湾周辺地域に分布しており、これらの地域で生み出されたと考えられている。しかし、3世紀中頃、S字甕A類に加えB類が出現する頃になると、S字甕の分布は全国的な広がりを見せるようになる。奈良県桜井市纏向遺跡ではS字甕をはじめとする伊勢湾地域の土器が多く出土しており、伊勢湾地域から多くの人々が集まっていたと考えられている。また、伊勢湾より東では、東海東部、甲信越、北陸、関東、東北南部まで広がる。尾張をはじめとする伊勢湾地域から発した土器文化は、古墳時代の始まりという日本史上の大きな変革期の社会・文化を理解するうえで、重要な鍵を握っているといえる。

また、東日本の一部の地域では、S字甕が在地で作られるようになり、伊勢湾地域とは異なった型式変化を遂げるようになる。このように在地化したS字甕は、「上野型S字甕」「駿河型S字甕」など地域型S字甕と呼ばれることがある。三重県津市雲出島貫遺跡から出土したS字甕(9-4)は、地元のS字甕とは異なる赤褐色の胎土で、口縁部の形もやや異質なものである。むしろ東海東部や関東などのS字甕に近く、地域型S字甕が伊勢湾地域に逆輸入されたためらしい事例かもしれない。（原田幹）



9-3 3世紀中頃のS字甕の分布



9-4 搬入されたS字甕 雲出島貫遺跡
(古墳前期／三重県蔵)

S字甕と砂の話

混和材に使われた雲出川の砂

S字甕^{たいど}の胎土^{じゅうこうぶつ}には、混和材として砂礫が多く含まれている。重鉍物分析によると、尾張平野で出土する多くの土器の胎土は、両輝石^{りょうきせき}が主体となっているのに対し、S字甕の胎土は、角閃石^{かくせんせき}・ザクロ石^{ざくろし}・黒雲母^{くろうんも}が主体となっている。このことから、S字甕の胎土に使われる混和材としての砂は、濃尾平野以外から入手された砂であると言われてきた。

有力な候補地としてあげられるのは、三重県^{くもすがわ}の雲出川^{うだぐんみ}である。雲出川は、三重県津市、松阪市、奈良県宇陀郡御杖村^{つえむら}にまたがる一級河川である。雲出川で採取した砂を顕微鏡で見ると、多量の角閃石と少量のザクロ石、黒雲母を主体としている。S字甕の器面を光にかざすと、金色に輝く黒雲母を確認することができる。

※重鉍物分析：土器の胎土に含まれる砂質の中で、比重が2.8以上の鉍物を取り出してその組成を胎土の特徴とする分析方法。

脚台部と体部の間に充填された粘土中の砂

S字甕の脚台部と体部の接合部には、接合部を強化するため、粘土が補充されている。この充填部の粘土にも多量の砂礫が混ざられているが、製作の途中で充填されるため、この砂礫は製作地で得られる可能性が高い。

尾張平野の遺跡から出土するS字甕の脚台部や体部下半についても重鉍物分析が行われた結果、この充填部の粘土に混ぜられた砂礫からは、両輝石など、尾張平野の胎土と関連付けられる砂礫が含まれることがわかった。

このことから、尾張平野で出土するS字甕は、材料(混和材)となる砂を尾張平野に持ち込んだ後に、尾張平野で製作されたと考えられる。(松本彩)



10-1 雲出川(雲出橋から下流を望む)



10-2 雲出川の砂と顕微鏡写真



10-3 S字甕の胎土中の砂粒



10-4 S字甕の脚台部内面

10-1～4: 本館撮影

S字甕と墓の話

S字甕が製作されていた時期は、墓の形が変化し、弥生時代から古墳時代へうつりかわっていく時期でもあった。東海地域では、弥生時代中期の終わりごろから方形周溝墓が広く採用されていたが、方形周溝墓の一辺のほぼ中央に陸橋部をもつものがみられるようになり、そこから前方後方墳へとつながっていったのではないかと考えられている。

尾張地域では、S字甕が製作されていた時期に、清須市^{はさま}の廻間遺跡、一宮市の西上免遺跡^{にしじょうめん}から前方後方形の墳墓が検出されている。

廻間遺跡は、朝日遺跡から北西へ1kmほどいったところにある。弥生時代終末期から古墳時代前期の集落と墓が発見され、0類からはじまる多くのS字甕が出土した。ここで発見された前方後方形の墳墓は推定墳丘長25m、前方部長8m、前方部幅9.5mを測る。

西上免遺跡では、墳丘長40.5mの前方後方形の墳墓が発見されている。周溝からは壺や甕などの土器が出土し、その中にはS字甕A類とB類がみられた。

S字甕のA類からB類が出現する時期は、S字甕をはじめとする東海系の土器が全国的な広がりを見せる時期である。東海地域で前方後方形の墳墓が見られ、その後前方後方墳が古墳時代初期の東日本に多く見られることと、S字甕が在地化していくほどに東日本に定着していくこととは、何らかの関係があるのかもしれない。

(松本彩)



11-1 廻間遺跡前方後方形墳墓



11-2 廻間遺跡墳墓出土土器



11-3 西上免遺跡前方後方形墳墓



11-4 西上免遺跡墳墓出土土器

11-1・3・4: 愛知県埋蔵文化財センター提供 11-2: 本館撮影